すさまじきもの

名前（　　）　日づけ（　／　）　できた数（　／28）

使い方　本文を声に出して読んでから、傍線の番号を手がかりに解きます。**この章段の山は「すさまじ」「ののしる」「いとほし」など現代語と意味のちがう語、⑤⑥⑩の「ぬ」の識別、⑩⑫の敬意の方向、そして⑬「何の前司にこそは」が表す落胆**です。**範囲**＝冒頭のものづくしと、後半の「除目に司得ぬ人の家」の場面（間は（中略））。

あらすじ＝清少納言が「興ざめなもの」を並べていく類聚的章段。前半は、昼にほえる犬、春の網代、季節はずれの紅梅の衣など、時季や場にそぐわないものを次々にあげる。後半は、除目で官職を得られなかった人の家。今年こそはと昔の家来まで集まって飲み食いして騒ぐが、明け方になっても任官の知らせは来ない。結果をたずねられても「何の前司に」としか答えられず、人々は翌朝そっと去っていく。去れない古参の者が来年の国々を指折り数えるようすを、作者は「気の毒で興ざめだ」と結ぶ。

一　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

①すさまじきもの。②昼ほゆる犬。③春の網代（あじろ）。三、四月の紅梅（こうばい）の衣（きぬ）。牛死にたる牛飼ひ。児（ちご）亡くなりたる産屋（うぶや）。火おこさぬ炭櫃（すびつ）、地火炉（ぢくわろ）。④博士（はかせ）のうち続き女児（をんなご）産ませたる。方違（かたたが）へに行きたるに、⑤あるじせぬ所。まいて節分（せちぶん）などはいとすさまじ。

（中略）

⑥除目（ぢもく）に司（つかさ）得ぬ人の家。今年は必ずと聞きて、はやうありし者どもの、⑦ほかほかなりつる、田舎だちたる所に住む者どもなど、皆集まり来て、出で入る車の轅（ながえ）もひまなく見え、もの詣（まう）でする供に、我も我もと参り仕（つか）うまつり、物食ひ酒飲み、⑧ののしり合へるに、果つる暁まで⑨門たたく音もせず、あやしうなど、耳立てて聞けば、先（さき）追ふ声々などして、⑩上達部（かんだちめ）などみな出でたまひぬ。もの聞きに、宵より寒がりわななきをりける下衆男（げすをとこ）、いとものの憂げに歩み来るを見る者どもは、⑪え問ひだにも問はず、ほかより来たる者などぞ、「⑫殿は何にかならせたまひたる」など問ふに、いらへには「⑬何の前司（ぜんじ）にこそは」などぞ、必ずいらふる。

まことに頼みける者は、いとなげかしと思へり。つとめてになりて、ひまなくをりつる者ども、一人二人すべり出でて去（い）ぬ。古き者どもの、⑭さもえ行き離るまじきは、来年の国々、手を折りてうち数へなどして、ゆるぎ歩（あり）きたるも、⑮いとほしうすさまじげなり。

語注　すさまじ＝興ざめだ。しらける。網代＝冬、川に竹や木を立て並べて氷魚（ひお）などをとるしかけ。冬のもの。紅梅の衣＝紅梅がさねの着物。冬から早春に着る色。産屋＝出産のための部屋。炭櫃＝角火鉢。地火炉＝いろり。博士＝大学寮で学問を教える官。家ごとに男子が受け継いだ。方違へ＝行く方角が悪いとき、いったん別の方角の家に泊まってから目的地へ向かうこと。あるじす＝客をもてなす。節分＝季節の変わり目。この夜は方違えをする人が多かった。除目＝大臣以外の官職を任命する行事。司＝官職。はやう＝以前。ほかほかなり＝あちこち別々だ。轅＝牛車の前に長く出ている二本の棒。もの詣で＝寺や神社へのお参り。ここは任官の祈願。ののしる＝大声で騒ぐ。先追ふ＝身分の高い人の通り道で、前の人をどかせる声をあげる（先払い）。上達部＝大臣・大納言・中納言・参議と三位以上の人。下衆男＝身分の低い下男。いらへ＝返事。前司＝前任の国司。つとめて＝翌朝。すべり出づ＝そっと抜け出す。去ぬ＝去る。来年の国々＝来年、国司が交代するはずの国々。ゆるぎ歩く＝体をゆすって歩き回る。いとほし＝気の毒だ。※清少納言＝平安時代中期の女房。一条天皇の中宮定子に仕えた。※本によっては、最後の部分を「いとをかしうすさまじげなる」とするものもある。

すさまじきもの

A　語句の意味と読み（1〜7）

（1）①「すさまじきもの」の「すさまじ」の意味を書け。

（2）③「春の網代（あじろ）」の「網代」とはどのようなものか。また、本来はいつの季節のものか。

（3）⑤「あるじせぬ所」の「あるじす」の意味を書け。

（4）⑥「除目（ぢもく）に司（つかさ）得ぬ人の家」の「除目」とはどのような行事か。書け。

（5）⑧「ののしり合へる」の「ののしる」の意味を書け。

（6）⑩「上達部（かんだちめ）」とは、どのような身分の人々か。書け。

（7）⑮「いとほしうすさまじげなり」の「いとほし」の意味を書け。

B　文法（8〜13）

（8）②「昼ほゆる犬」の「ほゆる」の活用の種類と活用形を書け。

（9）④「博士（はかせ）のうち続き女児（をんなご）産ませたる」の「せ」の文法的意味と活用形を書け。

（10）⑤「あるじせぬ所」、⑥「司（つかさ）得ぬ人」、⑩「出でたまひぬ」の三つの「ぬ」を、打消の助動詞「ず」の連体形と、完了の助動詞「ぬ」の終止形とに分けよ。

（11）⑧「ののしり合へる」の「る」は何の助動詞の何形か。また、この助動詞が付いている「合へ」の活用形も書け。

（12）⑫「殿は何にかならせたまひたる」の「か」の種類を答え、結びの語とその活用形を書け。

（13）⑭「さもえ行き離るまじき」の「まじき」の文法的意味と活用形を書け。

C　主語・指す内容・敬意の方向（14〜17）

(14) ⑦「ほかほかなりつる」とあるが、これはどのような人々のことを言っているか。本文に即して書け。

(15) ⑨「門たたく音もせず」とあるが、家の人々は本来、何を知らせる「門たたく音」を待っていたのか。書け。

(16) ⑩「上達部（かんだちめ）などみな出でたまひぬ」の「たまひ」は、誰から誰への敬意を表しているか。

(17) ⑫「殿は何にかなさせたまひたる」の「せたまひ」は、誰から誰への敬意を表しているか。

D　口語訳（18〜21）

(18) ④「博士（はかせ）のうち続き女児（をんなご）産ませたる」を口語訳せよ。

(19) ⑪をふくむ「いともの憂げに歩み来るを見る者どもは、え問ひだにも問はず」を口語訳せよ。

(20) ⑫「殿は何にかなさせたまひたる」を口語訳せよ。

(21) ⑭をふくむ「古き者どもの、さもえ行き離るまじきは」を口語訳せよ。

E　内容・記述（22〜25）

（22）②「昼ほゆる犬」と③「春の網代（あじろ）」が「すさまじきもの」とされるのはなぜか。二つに共通する点にふれて説明せよ。

（23）④「博士（はかせ）のうち続き女児（をんなご）産ませたる」がなぜ「すさまじ」なのか。博士の家のしきたりにふれて説明せよ。

（24）⑬「何の前司（ぜんじ）にこそは」という答えは、どのようなことを表しているか。また、なぜこのような答え方をするのか。説明せよ。

（25）⑮「いとほしうすさまじげなり」とあるが、作者はどのような人々のどのようなようすを、こう評しているのか。⑭の内容にふれて説明せよ。

F　文学史（本文全体をふまえて答える）（26〜28）

（26）この文章の出典『枕草子』の作者名と、作者が仕えた中宮の名を書け。

（27）①「すさまじきもの」のように、同じ種類の事がらを次々に並べていく『枕草子』の章段を何と呼ぶか。また、そのほかの二種類の章段の呼び名も書け。

（28）『枕草子』は、のちの時代の二つの作品とあわせて「三大随筆」と呼ばれる。その二つの作品名と作者名を書け。

【テスト直前チェック】この三つ　❶「すさまじ」は「興ざめだ」。①を現代語の「すさまじい（ものすごい）」で訳すと即アウト。②③は「時季はずれ」がキーワード。 **❷「ぬ」は下を見て決める。**⑤「せぬ所」⑥「得ぬ人」は下に体言→打消「ず」の連体形、⑩「出でたまひぬ」は文末→完了「ぬ」の終止形。「得」は未然形も連用形も「え」なので、形だけでは決められない。 **❸敬語は「地の文＝作者から」「会話文＝話し手から」。**⑩は作者→上達部、⑫は話し手（よそから来た者）→殿。⑬「何の前司にこそは」＝今年も任官できなかった、とセットで覚える。

▸ 古文・漢文の参考書のおすすめ（楽天・Amazonのリンクつき）　kotennosennsei.com/koten-kyozai-review/　▸ 解説記事にもどる